

木器と木の住まい

古田 昭司

高度化社会と人間のかかわり

最近、産業構造の高度化のため、新素材、バイオテクノロジー、マイクロエレクトロニクス等先端技術分野における技術革新が胎動している。

かつて、農耕社会から工業化社会へと移行し、現在は情報化社会と言われている。情報化社会には、高度な技術が不可欠で、エレクトロニクス産業等の発展にみるように目を見張るものがある。

このように、高度な技術が導入されればされるほど、その反動としてより人間的なあたたかみのあることが流行すると言う。

これを、ジョン・ネイスピッツは「ハイ・テック=ハイ・タッチ」の言葉であらわし、人間は技術と心のバランスを求めるものであると述べている。また「人間は生物であることをやめることは出来ない。どんなに世界が無機化しようとも、いや無機化すればするほど、自然物に対する思いはつのるのである」とも言われている。



店頭を飾りはじめた御櫃（おひつ・右）
蒸籠（せいろう・左）

木製品の復活と豊かな社会のゆとり

ここ一・二年、デパートやスーパーの家庭用品売場に行くと、かつてプラスチックや金属に替えられていった木器が目につく。盆、椀、杓子、^{おひた}俎をはじめ昔なつかしい手桶、湯桶、^{おひつ}御櫃のほかに^{せいろ}蒸籠までお目みえしている。また木調の豪華家具の売行きもよく、集成材のテーブルトップが人気を呼んでいる。

世の中の大半が中流意識をもち、年収1千万円以上の高額所得者が52万人（57年度）、59年3月末現在の個人貯蓄残高278兆円（日銀調べ）という生活環境の中で、かつての生活の合理化を求める時代から本物を求めるゆとりある生活の時代に変わって来ているのではないだろうか。

そのゆとりあるいはハイテクノロジー志向の世情のなかから、ハイ・タッチの一つとして木材のもつ自然の造形の美しさ、肌ざわり、ぬくもり等が見直されつつあるものと思われる。



木造住宅の動向

さて、北海道の新築住宅に対する木造建築率は、昭和54年度の73%から58年度は65%に、また、1㎡あたり木材使用量は40年度0.417m³であったものが、58年度には半分の0.211m³となり、新築住宅着工数の下降とあいまって、木材の使用量は大幅に減少している。

木造建築率の低下の原因は、木造持家の減少とか土地価格や入居層の変化もからんで、ワンルームマンション等を軸にしたコンクリート系住宅が増えたものと考えられる。また木材使用量減少については40年に入り新建材が急激に伸び、例えば、木製窓枠からアルミサッシに、さらにプラスチックサッシに、繊維板、合板サイディングから窯業系サイディングに、木質系内装材から石こうボードに、木質構造材から金属にと、それぞれ侵食されたためである。

木質材料の見直し

しかし、反面、最近の高級住宅の増改築は、かつてのプリント合板人気から、天然木特有の保温性、調湿性、吸音性など、見た目の美しさとともに、住み心地の良い木味を生かした本物に、また



調度類も部屋全体をとらえた新しいインテリアシステムとして天然木の味を存分に生かした木質素材にと、木調が人気の本命になりつつある。

このように、建築物の材料が木質系から金属系・窯業系へ、そしてまた木質系復権への兆しが見られてきている。

木材の良さと需要拡大

この機に「木材の良さ」を広く一般に理解していただいて、木材の需要拡大をすすめる必要がある。

木の住まいについて

- 1) 木を正しく使えば一番耐久性がある
- 2) 木は軽くて強く断面の大きな材は燃えにくく軟化しない
- 3) 木は適切な施工によって断熱性、防音性があり、温度や湿度を調節するとともに結露しにくい

などがあげられるが、何と云っても、厳しい風雪に耐え、年ごとに春材、夏材を繰り返して形成する年輪の織り成す自然の美しさと、材になってもなお生物として生きつづけるこのような素晴らしい木質素材に替わるものはない。

人の心におだやかな情緒をはぐくんできた森林の緑とともに、木器と木の住まいはやすらぎをあたえてくれる。

(林産試験場副場長)



脚光を浴びているウッドクラフト